

## 解説・詩人論

「他者の人生を動かす力」

三島久美子

「鈴木比佐雄詩論集『詩の降り注ぐ場所』に寄せて」

崔 龍源

「鈴木比佐雄の鋭敏な批評眼と野草花のごときやさしい詩性」

石村柳三

### 他者の人生を動かす力

『コールサック詩文庫1 鈴木比佐雄詩選集 一三三篇』 詩人論

三島久美子

秀れた詩と、本物の宗教哲学は、他者の人生を動かす力がある、と私は思っている。

鈴木比佐雄氏の、この詩選集は、そのような貴重な一冊だと思う。

一三三篇の詩と、一篇の詩論。それは、夏のはじめの頃ゲラで届いた。

詩選集には、二十七歳で出版した第一詩集『風と祈り』から、四十九歳で出版した第七詩集『日の跡』まで、更に、現時点までの未収録詩篇、そして、詩論における名作中の名作「詩の換喩的な内在批評が可能か」（詩論集『詩の降り注ぐ場所』収録）が、選別されている。

そこには、幼児期から現在までの、鈴木氏の映像が、驚くほどリアルに描きだされていた。

私は、鈴木氏については、電話の声しか知らない。詩

人論を書くにはふさわしくないと当初おことわりした。でも氏は「僕をまったく知らない人にこそ書いてもらいたい」と、一歩もゆずらない。おしよせてくる活火山の熱気のような声に圧倒されて、引き受け、氏の詩人の道のり一三三篇を、手にしたのだった（その中の詩二篇は『コールサック』と『詩と思想』でよんでいた）。

目次で、第一詩集の題名『風と祈り』を目にした瞬間、全身が題名に吸いこまれた。

詩人が最初に出版する詩集の題名が、その詩人の一生のテーマとなる、と私はずっと思ってきた。鈴木氏は若くして「祈り」の根源へ降りていた人だと直観した。

標題作「風と祈り」は、一月から十二月までをばらばらに解体し、詩人の深層の闇と光をもちいて、再構成している。ここには、詩論「詩の換喩的な内在批評が可能か」の中の（詩人の意識の在り方はフッサールが考えた例えば「判断停止、還元、本質直観、志向性、内在」などの現象学的方法とかなり共通するところがある。むしろ人間の意識の在り方を突き詰めていくと現象学的であり、詩的精神に似てくると言えるだろう。）という考

えが純粋な直進性をもってちりばめられていた。

終行「私 は 風 のごとく祈ろうとしていた」には息を呑んだ。風のごとく祈ったのではない。「祈ろうとして」、一步踏みだしかねている。美しいフレーズの中にはめこまれた「怒り」「足跡」「齒」「非情」「血」「疲労」「少年」「復活しない」などの言葉に心の闇の現場がうかがえた。そこには、詩人が日常生活で直面した無念さや哀しみ、憤怒などが潜在の渦を巻いていた。

祈りの根源は無明である。詩人はそこに降り立った。一步は踏みだしかねるが、半歩は踏みぬける。鈴木氏はそういう人だ。祈りへの渴望と共に、動きだした。

鈴木氏の長い道のりのなかで「祈り」という詩想と「反戦」は、大きく深く反復しあい熟してゆく。鳴海英吉、浜田知章両氏との運命的な出会いが、氏の底力を厚くしてゆき、それは実に多くの「他者」をも動かし続け、二〇〇七年夏刊行の『原爆詩一八一人集』（日文・英文）として結実した。「イーハトーブ賞奨励賞」受賞という感動的な評価は、誰もが知っていることである。今回の詩選集には核廃絶の願いと祈りをこめた詩篇が多数収録

されている。

その根底にある思想は〈飢餓と救済〉だと私は思っている。鈴木氏が、日常生活の場でそれを体感した、最初の詩が、第一詩集の中の「煤けた街」ではないだろうか。氏の生まれた街、南千住が舞台である。「家のすぐそばには一杯飲屋」そこでは「どや街」にくらす「労働者」たちが「焼酎を呷っていた」。隅田川沿いの小学校に通う鈴木少年が直視していたのは、そのような底辺に生きる人びとである。そして事件を目撃した。「ニヤニヤ笑って」いた労働者が、話し相手の「真剣そうな顔」の男を「ゲタを掴んで」「殴り始めた」「殴られた男は血だらけになった 私は黙ってみていた」「警察がきて二人」は連行された。ここまでなら私はそう驚かない。宮崎市内の路地裏で幼い頃、みかけた記憶があるからだ。衝撃的なのは次の一行である。

「私はその笑っていた男の人間臭さが忘れられない」鈴木少年は、この時、殴られた血だらけになった男ではなく、加害者の方に心をむけている。そこに〈鈴木比佐雄〉という詩人の人間性の深さを、私は読みとった。

どや街という貧困と飢餓の状況のなかで、人が人として回復してゆくにはどのような心の運動が必要なのか、詩人はこの日から「白鬚橋から」や「まぼろしの河」（第二詩集『常夜燈のブランコ』収録）などの詩作をこころみながら、歩き始めたと思われる。

四十歳で出版した第五詩集『呼び声』の中の「仇討ちの迷路」で、自己の内部に加害者をみいだしている。

「その夜 中学生の私は寢床を抜け出し路地に降り立った／愛想よく家に頻繁に出入りしていた男だった／時には楽しそうに父と酒を酌み交わして／人の良さそうな笑顔をした男だった／ある日 父から多額の手形を借りて夜逃げしたペンキ屋だった／その男を捜し出しとうとう路地裏で巡り逢った／私はまず木刀で足を叩き折り 腕のいい職人の指先をへし折り／獣のような呪いの言葉を発し 殺意をもって／父の会社を破産させた男を半殺しにしている夢を見た」

ここまでは詩人の深層の闇を浮上させた詩である。人間は誰でも、このような怨憎会苦という煩惱に苦悩する存在を自己に内在させている。この次の内容が詩人の本

来の命題といえる。そこには死刑囚永山則夫やあさま山荘事件を通しての問いかけがある。鈴木氏は、法律的立場でこの詩を書いたのではなく罪を犯した人間の底に粘着したままの闇を、詩という光で照らしたそうとしたのだと思える。

私の愛読する野間宏氏の「歎異抄・増補新版・ちくまぶっくす」には、罪や悪についての解釈が、親鸞の生きた戦乱の世を背景にのべられている。要約すると、戦争で何もかも失い極限状況におとされた人びとが、飢餓ゆえに他者を傷つけあるいは殺しものを奪う、「罪を犯さずしては生き得ない現在の一刻一刻が地獄」とある。罪の深さゆえに心の奥では怯え苦しみ、しかしまた罪を犯してしまう身心の飢餓。その苦悩と悔いに救済の光はさしてゆけるのか。罪を犯した本人自身に救われたいという必死が一寸でもあるなら、救済の光は届く、という内容だが、少しずつ詩人論に戻ってゆく。

救われたいという渴望は血を吐くほどの謝罪の重さがあった心の運行である。

親鸞の時代と現代では、状況は異なるが、日常に不意

に出くわす裏切りの深い傷も、欲望ゆえに権力者が犯す戦争ゆえの悲惨さも、人間を飢餓の地獄におとしてみまうことには変わりはなく、鈴木氏の道のりが「祈り」から「反戦」へと反復し続けてきたことは、当然のみちすじだった、と確信している。そこに在る、浜田知章氏の父君が浄土真宗の熱心な信者であったという鈴木氏の別の詩論の一節は、驚くほど重要だと、私はうれしかった。詩人の道のりに登場する「南千住」は、「福島の家」や現在の居住地「柏市」と共に、氏にとって魂に隣接する「場所のエネルギー」となる大切な愛の現場といえるだろう。

「場所のエネルギー」というのは、詩論「詩の換喩的な内在批評が可能か」の中にくり返しでてくる言葉である。「驚きを方法化したと言われるフツサル」の「現象学」をあかしながら次のような論が展開する。

「私は詩を書く際に、いつ、どこで、という時間と場所から促される驚き又は衝撃がなければならぬと考える。その時に意識に立ち現れてくるものを想起し、映像、意味、感情などを再構成していくものこそ「場所

する「場所のエネルギー」を汲み上げ他者を発見する方法」ということになる。

学生時代に全身に熱く彫り込まれていた言語認識や詩法などのすべては、いつのまにか、たくまずしてひとりでに、正確に丁寧な詩篇にかかれていったと思われる。

換喩の名作のひとつに「シユラウドからの手紙」を私はあげる。四十九歳で出版した第七詩集『日の跡』の中の一編である。「父と母が生まれた福島の家」そこに建設された「福島第一原発 六基」「福島第二原発 四基」さらに「新潟柏崎刈羽原発 三基」「十三基の中のひび割れた未修理の五基を／原子力・安全保安院と東京電力ははまだ運転し続けている」これらは、「二〇〇〇年七月／その人はシユラウド（炉心隔壁）のひび割れが／もつと広がり張り裂けるのを恐怖した／東京電力が十年にわたって／ひび割れを改ざんしていたことを内部告発した／二年後の二〇〇二年八月 告発は事実と認められた」。詩人は「その人」の苦悩と告発の勇氣に深い思いをよせている。

のエネルギー」だと気づかされる。「場所」とはアリストテレスの修辭学の「発見」の場所（トポス）であり、フツサールの「原故郷」や「生活世界」であり、ハイデッガーの「世界内存在」であり）と、論は深さをましめてゆき、西田幾多郎も登場し、最後に浜田知章氏の詩論集『リアリズム詩論のための覚書』の名言「詩人の本質とは自分が立っている場が世界の中心であるという認識であり、詩の発生も時空のスパークするところにあるのですから」をあげている。

「他者のために書く」という浜田詩論の核心を引き出した鈴木氏は（「他者のために書く」とは、隣接する存在の感動を物語ることだろう。その際に他者の場を想像していく換喩的認識が大きな働きをするだろう。）と結論づけた。

「換喩」は、氏が大学生時代に専攻した哲学の講演会で佐藤信夫氏から学んだ修辭学で、レトリック（修辭学）は、アリストテレスの頃から二千年以上の歴史をもつ学問で、レトリックは人間の認識行為に深く関わっている、という。その中の「換喩」は、要約すれば（隣接

原郷への愛が、人類全体の生命の母体へ「自然」を再発見、再認識させてくれる詩で、「換喩」とはこのようにもちいるものと、しみじみと味わうことができた。同時に、海を、自然を被曝シヤにしてはならないという永遠の祈念がこめられている。

鈴木氏の詩は、詩論と二分のずれもない。美しく強く透明度の高い作品が湧出される。

未収録詩篇Ⅱの「花巻、豊沢川を渡って」は、詩論の中の「詩とは読む者の意識にシニフィアン（聴覚・映像・意味するもの）を通してシニフィエ（概念・意味されるもの）を届かせる豊かな言葉」（三島が一部要約）という、ソシユールの言語学の基本の思考が裏打ちされている。

終連に、息を呑んだ。

あの人の背中はいつのまにか  
稲田の黄色い穂先をすべって  
五輪峠を越えて

岩手山の方へ消えていった

鈴木氏が敬愛する宮沢賢治がモデルであるが、読む人にそれぞれの祖霊の美しさを届けてくれるように思える。金色の穂は、まるで女神のやわらかな掌のようで、その無数のしなやかな光の上に、おおむけの一人が身をゆだね、ゆらゆらと揺れながら、その背は流れるように滑るように漂うように、天上界へと送られ消えてゆく。自然のおおになる実りの力に全身全霊をゆだねてゆく至福のシニフィアンとそして、農耕民族の信仰を基層とした精神風土が、宗教儀礼のもっとも純粹で切実な思想シニフィエと融合している。

「ヒドリノトキハ ナミダヲナガシ」の「ヒドリ」（日雇い）の一語には、宮沢研究の地を這うような取材の重みと愛情が伝わってくる。

鈴木氏は「リングゴにあたってもいいから／歩きながら 芯まで食べた」と書く。激しいリングゴである。本当に、リングゴにあたって死んでもいいという意味では、もちろん無い。「あたってもいい」とは、詩人のこの地に立つての、生きる覚悟の再燃を、意味する。

表紙の声である。

たくさんの出郷の魂を見送りながら、鈴木比佐雄氏は、より深い生の領域へと、他者の人生をも動かすすずんでゆく。

私の詩人論など足元にも及ばない、遙かなる長距離ランナーである。

五十五歳までに、あまりにも多くの愛する人びとの他界を見送ってきた鈴木氏である。三歳年下の弟の自殺は鈴木氏が、十八歳の時だった。父も母も逝った。師友も詩友も畏友も今は冥界にたくさん存在する。

表紙の絵に描かれた抽象の白い植物は、故福田万里子氏に教わった「シロバナタンポポ」かもしれない。「綿毛に変わり」天上界へ「無数の白い針が舞いあがり」別の詩を呼ぶ。

人は光

人は影

人は光と影

人は苦しみ

人は歎び

人は闇から生まれ

束の間 光に抱かれて闇へと還ってゆく

何を急ぐことがあるうか

第七詩集『日の跡』の中の「日のゆらぎ」の一節が、

鈴木比佐雄詩論集『詩の降り注ぐ場所』に寄せて

——『Esナシマ』第12号(2006年)より再収録

崔 龍源

平和はあるのか。いや、何処にもない、と鳴いているではないか。ムラサキツユクサの咲く草むらのなかから聞こえてくる、そんな虫の声が。それは一つの声ではなく、いつせいに、地球のいたるところを、ずたずたにしたものたちを、断罪するかのように鳴いている。この地上のいたるところ、戦争の傷跡をしるさない土はない。その土の記憶のしみついた虫たちが、訴えているのだ。

しかもこの国は、核を投下された唯一の国ではないか。核の痛みは、この列島を形成する津々浦々の土壌にしみついている。

一九四五年八月六日、「リトルボーイ」と名付けられた原爆が、「やすらかに 美しく 油断していた」(石垣りん『挨拶』) 広島に投下された。そのいまわしい原爆について、

私はチビ、すべての鉄たちの孫／本名はリトルボーイだ。／リトルボーイはルーズベルトのニックネームだ。(略)／私はニューメキシコ州北部／ロス・アラモスで生まれた／

という詩行で始まる韓国の詩人、高炯烈氏の八〇〇〇行近い長編詩集『リトルボーイ』の日本語版が、今夏、出版された。悪魔の子「リトルボーイ」を擬人化して、「人類の文明が生み出してしまった核兵器の意味」、「原子爆弾の二重上重の被害者である朝鮮人の悲劇」、「原子爆弾そのものの破壊のさま」(柴田三吉「人間の頭上にいまも落ちつづけるもの」『コールサック55号』)という三つのテーマを交錯させて描き切った、たぐいまれなこの詩集について、僕は語ろうとしているのではない。

この詩集の訳詩を長年掲載し続け、出版元となった「コールサック」という個人詩誌の主筆者である鈴木比佐雄氏の詩論集『詩の降り注ぐ場所——詩的反復力Ⅲ(1997—2005)』について語りたいのである。

長い前置きになってしまったが、なぜ先に鈴木氏が、

その情熱をもって出版した『リトルボーイ』を取り上げたかという点、そこに詩人であり、詩論家である鈴木氏の素顔が、言わずもがなで伝わるのでは、と思ったからである。

『リトルボーイ』を出す意義を、言いたいのではない。

鈴木氏の真実を見極めようとする視線、その視線が降り注ぎ、価値あるものと認められたものを、存在せしめようとする精神的態度を言いたいのである。そして氏が見極めた真実や、価値を認めた詩人達を、世に埋もれさせまいとする志の高さは、どこに由来するのであろう。

『詩の降り注ぐ場所』を繙いてみよう。この書は、五部構成から成っている。「Ⅰ 場所のエネルギー」・「Ⅱ 『山河』『列島』の詩的精神」・「Ⅲ 戦後詩と内在批評」・「Ⅳ 詩的現場の透視力」・「Ⅴ 詩の降り注ぐ場所」である。

まず「Ⅰ 場所のエネルギー」では、氏が師と仰ぎ、敬愛する二人の俳人、能村登四郎と福永耕二との出会いによってもたらされた、詩を書くきっかけについて語り出しながら、強烈で真正な詩的精神の発露をもたらす

「場所のエネルギー」について言及している。鈴木氏の独自の視点であり、考えの基点ともなっている「場所のエネルギー」とは、

私は詩を書く際に、いつ、どこでという時間と場所から促される驚き又は衝撃がなければならぬと考える。その時に意識に立ち現れてくるものを想起し、映像、意味、感情などを再構成していく者こそ「場所エネルギー」だと気づかされる。「場所」とはアリストテレスの修辞学の「発見」の「場所」(トポス)であり、フッサールの「原故郷」や「生活世界」であり、ハイデッガーの「世界内存在」であり、西田幾多郎の主観客観以前の「純粹経験」の述語的「場所」など多くの優れた哲学者たちが意義の根源を考察したことと重なってくる。

とある。それに加えて、氏は、ここで浜田知章氏の言葉を借りて、「他者のために書く」ことを提示している。他者なくして、われわれは在り得ない。他者の存在、他

者が立っている場所に、自分を置き換えることで、自己の存在の意味や、自己の立つ場所を認識し、詩的言語の内在化が行われる。鈴木氏のいう他者とは、広義にとらえるべきだろう。一匹の虫、一本の草、あるいは花、ひとりの傷ついたけもの、生命を分け合っているあらゆるもののなかの、個々それぞれを指していると考えられる。

またこの章で、もう一点大切なことは、蕪村、萩原朔太郎、硬質の抒情としての伊東静雄とともに、共感と根源的場所への郷愁のような思いをこめて、宮崎の詩人たちが取り上げられ、語られていることである。宮崎という中央からは遠く離れた地に咲いた野太い花のような詩人たち。ここまで読んで、気付かされることがある。

鈴木氏は、現代の、いわゆる商業誌的な詩誌に、その詩が掲載されているメジャーな詩人達に触れていないことに。それは故意ではない。なぜなら、理解させられるからだ。鈴木氏の詩への考え方のフィルターを通して、取り上げられた詩人達は、根源的な存在に向かって問いかける詩的精神の保有者であることを。氏の胸の奥にあるものを揺さぶり、心臓を脈打たせ、体中に熱く赤い血

詩人だと思う。

ところで、内容についてだが、日本の行った戦争を決して風化させてはならないという考えを基本に、戦後、この世界の各地で起こる戦争に対して、独自のリアリズム的手法によって、自己と他者とを対峙させながら、質の高い反戦詩を発信し続ける浜田知章氏について、

一篇の詩に込められた圧倒的熱量が、その時代を生ききった者だけが知る、生の危機の断面や、生の充実感を、確かな手触りとともに実感させてくれる。

とある。浜田知章氏も鈴木氏も知っている。人間は、ちよつとした優位性に立っただけで、モンスターに変わることを。われわれは、モンスターに変貌してはならないのだ。

次に、シベリアでの抑留体験を、豪放かつ繊細に、ある意味で、この二律背反的手法を、自由に駆使した独特の文体の詩を書く鳴海英吉氏については、「昼間から酒を持って、夜遅くまで語り明かした」とあるごとく、向

をめぐらせてやまない詩人達を選択しているのだということ。氏の記憶のなかにある遺伝子を、つねに覚醒させるものから、あたかも呼び止められたかのように。渡辺修三、本多利通、その弟である本多寿、金丸榊一。宮崎という場所で、「原語」を発する詩人達の言葉に耳を傾け、魂を研ぎ澄ませながら、「場所のエネルギー」の本質をつかみ取っていったのだということ。と同時に、詩の世界にある垣根を取り払うべく、内在批評という観点からの闘いをしるしてゆくことになる。

それが、「Ⅱ 『山河』『列島』の詩的精神」における浜田知章、鳴海英吉の評価と全集の実現、「Ⅲ 戦後詩と内在批評」のなかの「中桐雅夫と『荒地』の戦争責任」などの追及につながってゆく。ここでまず、内容を紹介する前に特筆すべきは、先達詩人である浜田知章、そして鳴海英吉の全集刊行に奔走し、実現させたことである。氏が敬愛する詩人とは言え、全集刊行に向けての誠実で粘っこい行動力と、無償にちかい精神の在りようには、敬服するばかりである。このような魂に根ざした行為は、そう簡単に行えるものではない。稀有な行動的

田邦子の一連の父に関するエッセイを彷彿とさせる、親しみと畏敬をこめた文章で描かれていて面白い。詩人でもあり、日蓮宗不受不施派の研究者でもあり、町工場で鉄板を叩いていた一介の労働者でもある鳴海英吉を、広く世に知ってもらうため、できるだけたくさんさんのエピソードを盛り込みながら鳴海英吉論を展開したと言える。

「Ⅲ 戦後詩と内在批評」に移ろう。この詩論集で重要な位置を占めている戦争や原爆及び戦争責任に関する論者がまとめられている。ここで最もスリリングな筆致で書かれているのが「中桐雅夫と『荒地』の戦争責任」である。鈴木氏の読みの精緻さとの確さが遺憾なく發揮されている。加えて、膨大な資料を集め、読みこなしている事実が驚かされる。ゆえに鈴木氏の筆致は具体性を帯び、自身の戦争責任をうやむやにした中桐雅夫氏の欺瞞を見いだし、それを不問に付そうとした「荒地」グループ批判に至る妥当性をも獲得している。氏によって、戦後詩史観の訂正が、刻々と行われることを期待する。

この章の後半部「青い光」と『本当の記憶力』や、「記憶を生きた詩人・『記憶喪失』を恥じない詩人」な

どの戦争と原爆に対する詩を基調にした詩論には迫真性があり、二度とこのような愚行を許してはならないと言う熱いメッセージが伝わって来る。インド、パキスタン、北朝鮮へと、核兵器が拡散している現在、地球やそこに生きる無数の生命を破壊し、滅ぼす核兵器を、廃絶させなければならぬという鈴木氏の願いは、戦争や広島・長崎で亡くなった死者たちの無言の祈りや願いと重なり、響き合っている。

それはこの章のもうひとつの課題、「北の詩人の『透明なエネルギー』」などの詩論に内包されている。鈴木氏の生涯のテーマ「鎮魂」に直結してゆく。氏は天くして弟さんを亡くしている。僕は、氏の詩集のなかの弟さんの死をうたった詩を読み、泣いた記憶がある。鳴海英吉の自称「ふさ子ちゃんシリーズ」でも泣いた。宮沢賢治の妹トシへの詩編でも泣いた。鎮魂と泣くことと、何の関係があるのか、と問われれば口を噤むしかないが、そこには言葉に純化された、柔らかで美しい魂の実現があるのだ。氏の言う「透明なエネルギー」の発現が。

この世界は、何と鎮魂のうたを捧げなければならない日本人を助けるために死亡した李秀賢さん」への挽歌とも言うべき批評文、それを契機に行われた釜山での文化活動に、韓国の「原故郷」を探し当て、両国の「真の和解」を切望する文章で終わっている。

詩の本質とは何か。詩は民族を越えて存在する。だが詩人は、それぞれの国の通時的な歴史と共時的な現実とを、つねに内包している。詩人と詩人の出会いは、互いの精神の強度を増し、深化させ、火花を散らすものでなければならぬ。認め合ったところで、先へ進むものではない。一方の詩人の読みが的確であればあるほど、もう一方の詩人は、それに応えるべき詩を求めて緊張する。緊張は苦痛を伴う。鈴木氏は書いている。「いい詩を読んだ後、……その時伝わってくる感動とは、確かに他者の経験や認識が、自己に直接届いた稀有な瞬間なのだ」と。その「稀有な瞬間」をもたらさなければならぬ。この苦痛は、脱皮や自己変革を要求する。こわれてゆくかもしれないという不安、恐怖、そこを乗り越えなければ、新しい自己、あるいは詩を獲得することはできない。

鈴木氏の詩論集は、それを突きつける。鈴木氏の詩へ

死者たちで満ちていることか。言葉に関わるわれわれは、他者の痛みを背負い、他者のかなしみを共にかなしみ、他者の十字架と共に倒れてゆくことを否んではならない。それが同時に、氏の言う「他者との対話の出発点」に立つことにつながるからだ。鎮魂とは、魂の柔らかな部分で、世界の苦痛や、理不尽な死を強いられた死者の肉の傷さえ負うということだ。負って、魂をできるだけ「透明なエネルギー」の集まる場所とすることだ、と僕は氏の論考を読み返しながら考えさせられた次第だ。

「IV 詩的現場の透視力」は、主に書評を中心に編んである。鈴木氏が、これは、と思う詩人が、または詩が、どのようなものであるかを把握することができる。そんな仕掛けがほどこされてある。鈴木氏と同じ透視力をもって、精神性や詩の根源性の深い淵を覗き込むことができる。「他者の生きる姿勢を掬い上げる眼差し」を持つことが。

最後はこの詩論集の標題となっている「V 詩の降り注ぐ場所」で、この章は韓国、アジア、在日の詩人をしてり上げるとともに、「新大久保駅で関根史郎さんと一緒に愛情を認識すればするほど、それに応答するための自己との戦いが必修になってくる。また鈴木氏の詩論集には、重要な問題がいくつも提起されている。例えば、「日本の戦後詩はどの国よりも少なくともアドルフが提起した問いに応答する、倫理的課題を宿命的に負っていた」など。鈴木氏の言葉は、荊軻の匕首の鋭さで、詩を書く者に擬せられている。少しでもその詩に権力への傾斜や人間の傲慢などがしるされたら、容赦なく打ちさえるとでも言うように。

さて、どのような詩を書けばよいのか。今夜も眠れない。

鈴木比佐雄の鋭敏な批評眼と

野草花のごときやさしい詩性

石村柳三

一 消しえぬ原風景を背負い

人は生きて行く自らの人生にあつては、自らの育つた風土と、自らの背負わねばならぬ風景がある。

そのような生きて行く風景のなかでも、消しえぬ結節としての眼の風景もあろう。それは忘れられぬ悲しみ、喜び、怒り、涙、幸せなどをつつんだ、人の感情や思念の底に消してはならぬ幻燈のごときに燃え、明滅しつづける《原風景》の重さとなつて浮かぶからだ。

そうして、そこに人は自らの出自の原風景に呪縛され、あるいはときに肉親の絆という郷愁となつて、自らを問ひ、内省し、肉親家族としての有り様を思念する、人生風景ともなるからだ。

人生風景の《消しえぬ眼の結節》の原風景にこそ、その人の人生暗示のような生き様的なさげびの声があり、背負う眼の灯り、運命の不思議な羅針盤に通底すること

羅の業を持つているものである。それが人生という不思議さであろうと思う。

たとえばそれが悲しい風景であろうと、嬉しい風景の姿であろうとも、それを重く身につける精神とするか、自覚的な精神のものとして行くかによつて、その人の人生観にひびく影響を与えていると感じているからだ。

そのようなことというか、立場からの考え方から、私は冒頭に人生論ともいうべき、人の原風景の眼のもつ意味のふかさをまず語つてみたのだ。

この内省の眼を、《原風景》の残像の必要性として、自ら体験し重い修練の精神としてぶらさげ、背負つて来た詩人がいる。そこから消しえぬ「人間論」、もつと身近にいうならば「日常の生活論」、そして居場所としての「場所論」としての人生風景画として、大衆というか、庶民の感覚の大切さをさげぶ、生活者としての言語表現を大切にす詩人となつてである。

自らの原風景の感受から回帰させられ、眼を向けさせられ、現実風景の生活を歩いてきた一人こそ、鈴木比佐雄という鋭敏な詩人であつた。そこに私は、まず詩人と

もあるからだ。自らの歩む人生、自ら見つめ問う、魂の人間としての絆のごとく。

そうした人としての喜怒哀楽を背負う有漏者として、出自としての《原風景》に導かれ、その自らの道を求め歩むこともあるからだ。宮沢賢治は、それを自らの「ひとりの修羅」として捉え、あるいは静謐な眼で凝視し、そこに賢治自身が《業の花びら》を纏つた迷える人として呼んだ。

運命的というか、宿命的というか、その背負わねばならぬ人生の原風景の沈黙の悲しみ、その重さの風景の夕映となつてだ。すなわち、その人の風景のなかの風景としての、《原風景》としてである。

そういう人生としての明白につながる風景というか、生きている実人生というものに、消しえぬ眼と、消してはならぬ血族的経験心理のふかさがあり、人としての血の郷愁をうんでいるのだともいえよう。人生に密接に流れているとも言える、郷愁性の愛の心情、その人の原風景の思念となつて、その人の生き方をときには強く、ときには問いつづけねばならぬ人として、歩ませて行く修

いうよりも、人間の生き方としての言説を吐く、背骨の魂を見る思いを抱いていたからだ。

この鈴木比佐雄という詩人は、自らの人生の重さでもある原風景の夕映を自覚しつづ、そこから人生というものの理念的な足音を知り、その生き方の実践として、詩人のもつ詩想や、批評精神を矜持し、理不尽な社会や人間エゴである環境問題、差別社会への批評やエッセイなどの鋭い言語を放つて行く。その論は人の住む「場所とは何か」という《場所論》の視点から把握し、人間の生きる存在としての風景風土の大切さをその原点として唱え、その在り方を暗示し、言説しているところにあるといつていい。

彼の詩人として、批評者としてのリアリストの眼から主張された言語となつてだ。そうした真面目さの、内在された精神を柱としてだ。そこには、鈴木比佐雄という詩人の、自存者として悩んだであらう、消しえぬ原風景がつつまれていることは言をまたないであらう。

鈴木比佐雄は、戦後の混乱期がようやく抜け、日本の経済成長期に入ろうとする時代であつた、昭和二十九年

(一九五四) 東京荒川区の下町に生まれた。父の仕事は祖父からつづく石炭屋であった。上には兄と姉が、下には弟が一人いた。比佐雄は、父の後姿を見て育ったであろう。父の仕事の苦勞も、子供心にも知っていたことであろう。その父の仕事もうまく行かず、生活にも苦しかったこともあったようだ。東京から、松戸市、市川市と転居転校したともいう。

そうした転居も落ち着いた頃、弟が自らの命を絶つというショックな事が起きた。比佐雄が十八歳で、弟は十五歳であったという。

弟はこれから青春を浴びる年代に入ったのに、何という悲しさであろう。比佐雄は兄として弟の苦悩も真剣に捉えず、聞けなかったことにただ後悔する。生活のためのアルバイトに精を出し、弟の悩みを見抜けなかった自分を悔やみつつづけている。その悲しさを背負いつづけている。

また父も、仕事上で多額の手形を貸した男に夜逃げされ、会社を破産されとん底に落ちいつていた。

その辺の事情を鈴木比佐雄は、詩人として数篇の詩と

わる／燃え尽きた石炭が灰となって落ちてくる／燃え残った骨片を骨壺にあつめて蓋をした／石炭風呂の湯気と鼻歌が／壺の蓋を押し上げ渦巻いているか

(「鼻歌」より部分引用)

こうして、鈴木比佐雄の肩は現実の日常の重さとしてのしかかってくる。

けれども彼は哲学や詩文学に興味を示すようになり、アルバイトをしながら学問の大切さを知るようになった。アルバイトには新聞配達の時期もあった。その新聞配達のとときに道端にあった枇杷の実を失敬し喰ったこともあったという。

その〈枇杷〉を齧りながら、その種の大きさにふと想念した詩行がユニークで面白い。

「ビワのなる日」という詩だ。

ここには、経験の眼を通したユーモアとペーソスの心景があり、青春の葛藤もあったようだ。そこにうずいている沈んだ、自らの思念を見地する作品ともなっている。温かさがあるからだ。その素朴で、一つの夢をもつてい

して残している。

その中でも、第四詩集『火の記憶』(一九九〇年)の「鼻歌」の作品は、沈痛な悲涙を留めた鎮魂の詩として私は留眼した。その情景を詩人はふり返って詩行する。

燠火のような夕陽が消えかかるころ／ずっしりと重い錠を振り上げ廢材を薪にする／立てると胸まである大きなシャベルで／貯炭場から化石の埋まっているような石炭をすくってくる(略)／風呂場の窓から湯気が漏れ／黒い人影がバシャバシャと音を立てている／あれは十五歳で死んだ弟の影か／それとも六十六歳で亡くなった父の影か／湯音にまぎれて鼻歌が聞こえる／弟の好きな漫画の主題歌だろうか／酔っ払った父の歌う軍歌だろうか／解放された歌声がいつまでも続いている(略)／弟は死ぬ数日前に透き通りそうな背中を見せて／散らかし放題の机のなかを整理した／父は死ぬ一年前にわずかな仕送りに感謝をいい／生命保険証書を渡し葬儀のことを頼んだ(略)／赤い炎が安らぎの朱色の炎に変

る作品を引用してみよう。

六月の早朝／枇杷のなる日／ぼくは新聞配達に出かける／ドクダミの白い花が咲き乱れ／一晩で立葵がのっぽになり／胸を反らしていくつも赤いらっぱを／空に向けて鳴らしている／ぼくはオイルショックの新聞を携えて／枇杷がたわに実る木の脇を通り／アパートの階段を駆け登る／眼下に広がる墓地の石碑たちを恐れて／ぼくは朝日が高くと高く上がるのを祈った／死者たちがあざわらっている声が聞こえた／平家物語の琵琶法師のように／奢れるものも久しからず……／たかが油や使所紙が無くたって……／ぼくの喉はカラカラだった／シルクロードをさまよう商人のように／ふらつく足で階段を駆け降りると／枇杷の実をむしり取り／引き締まった果肉を食べた／ぼくの肉が枇杷の果肉に染まっていた瞬間／枇杷の種のような存在になりたいと誓った／六月の早朝 墓地の死者たちの前で十九歳のぼくの臆病な胸は／ちっぴけな枇杷に励まされ／たしかに琵琶

琶の音が腹の底から鳴り響いたのだ

この詩人の青年らしい苦悩と、真面目さの信念の夢が実のように浮かんでくる。ペーソスのやさしさをつつんだ顔となって。

就中、へほくの肉が枇杷の果肉に染まっていく瞬間／枇杷の種のような存在になりたいと誓ったの詩語が、私にはことほほえましく思われた。枇杷は種が大きく、骨太の信念の心音を彼の青春に聴いた感覚になったからだ。

鈴木比佐雄という、青春時代の背負っていた信念を秘めた精神をだ。

## 二 大学で哲学を学び経験の眼を深める

枇杷の命である大きくてがっしりとした《種》のように誓った鈴木青年は、アルバイトしながら法政大学の哲学科に学んでいた。学問の大切さを認識し、自らの思念の開目と反復思想の必要性を知り、キルケゴールやカント、サルトル、ハイデッガー、フッサールなどの著書を読み、い風光をながめる姿があり、浮かびあがらせている。人生の夕映の慈しみを知った哲学者となって。一篇のすぐれた追悼詩となり、レクイエム詩ともなっている。

卒業論文の恩師であった矢内原教授を、苦学生であった鈴木比佐雄は後年「樹のごとく立つ哲学の師」であったと評している。

まこと尊敬する恩師の哲学者への詩行に、私はうらやましい相逢を覚える。詩人として、批評者として活躍する鈴木にとつては、忘れられない師の風景でもあったであろう。

とまれ、ここにはすでに詩人としてのリアルな眼がうずいている。苦勞しながらも、自ら学んだ哲学科を卒業し、彼のリアルな目とストイックな心情は、自らの前進の灯りのように照らし、言語表現の道を往くことになる。

社会の厳しさは、アルバイトをしながら大学を出た彼には、既に経験されていたことであるが、それが卒業という肩書をつけて、まさしく社会人となることは、精神的にも多少ちがう重さというものを、さらに背負い知ることになったであろう。それこそ世間師のうごめく、

読み、思念の眼を掘り下げふかめていた。

哲学の眼を開かせ、人生の何かを教えてくれた恩師の教授に矢内原伊作がおり、哲学反復の青年鈴木比佐雄は影響を受ける。矢内原伊作は元東京大学総長の矢内原忠雄の長男として生まれた哲学者で、当時法政大学で教えていた。著書に『ジャコモッティとともに』『抵抗詩人アラゴン』『芸術家との対話』。翻訳にカミュの『ジジフォースの神話』等がある。

鈴木比佐雄の恩師でもあった矢内原伊作先生について、詩人の彼は、「樹の人——矢内原伊作さんへ」の詩を書いている。

それは矢内原先生が、サルトルを講義するときの描写として語られている。

〈十年後／あなたの訃報を知ったとき／講義中、ふいに訪れる沈黙を想起した／サルトルを語るあなたの口元が中断し／顔を右に向け窓の外をながめる〉

この恩師の姿に、ほほえましい老哲学者の顔とやさし

感情の垣塙の現実の社会にである。そうした人間のエゴや、仮面や、偽善偽悪の世間を高一層身近に凝視し、実感して行くことになる。

また、哲学的感性を内在し、社会の現象や世界の出来事にも関心を向けるようになる。詩人という詩文学にも足を踏み入れ、多くの詩人たちと交流して、その哲学的感性の思念に詩的感性を混入させ、自らの内在したリアルな眼を養うのであった。

交流し、影響を受けた詩人は能村登四郎、金丸柁一、杉谷昭人、本多寿、福田万里子、大崎二郎、御庄博実、長津功三良、嵯峨信之、木島始。さらには彼の人格にも影響を落とすほど、強く影響を受けたのが鳴海英吉、浜田知章、宗左近の三人の詩人であった。三人とも行動し、実践する信念を背負っていた人間でもあった。とくに、庶民として大衆の立場の命終観と、平和を願う詩人として立っていた。

そうした親交と尊敬する詩人の出逢いから、鈴木比佐雄は第一詩集『風と祈り』（一九八一年）、第二詩集『常夜燈のブランコ』（一九八七年）、第三詩集『打水』

(一九八九年)、第四詩集『火の記憶』(一九九〇年)。

つづけて第五詩集『呼び声』(一九九四年)、第六詩集『木いちご地図』(一九九七年)。そして第七詩集『日の跡』(二〇〇三年)などを上梓して行く。

この他にもエッセイ、評論なども精力的に執筆し、数冊の著書も出している。

初期の頃の詩集である「秋」や「部屋」の詩篇には、ナルシスト的性格をひく影のような匂いもあり、初々しい感性も見られる。また私の好きな「模倣」「予断」「沈黙(キルケゴールを読んで)」などは力作だ。リアルな眼とストイックな影を内包した、彼自身の独自性を盛つた、思想と感性をそこに与えてくれる。

作品のなかに浮かぶ、影絵の明と暗をうつす場所のさげびをするようにして、だ。

「場所」という自存する人間の立場や風景から、独自性の見方というか、思想の一面を語っているのが、この詩人の鋭い言説を放つ評論集『詩の降り注ぐ場所』であるう。見落としてはならない、詩人としての彼の理念を語る、詩想と実践を流露した著書でもあるからだ。詩人

しての人種人格をも取り上げている。環境問題もそうである。

そうしたなかでも、とくに忘却してはならないのが、平和への強い伝言<sup>メッセージ</sup>であろう。

身近な家族、日常のある生活、テロや戦争に向く現実の目線、その視点から、原爆や戦争で亡くなった死者への祈念の声として、平和へのメッセージとして出版した『原爆詩一八一人集』(日本語版・英語版)の大きな仕事を実現した。さらにつづけて、今次大戦における日本の空襲を中心にした『大空襲三二〇人詩集』を刊行して、平和への願いを発進している。

これも彼の詩人としての、一つの実践であろうと、私なりに認識している。このことも付け加えておきたい。

さて、こうしたことから私は今、この『コールサック詩文庫Ⅰ 鈴木比佐雄詩選集一三三篇』のゲラ刷を拝見し、この詩人の背骨をなす詩篇の重さと、さげびを改めて味わい知らされている。上梓された七冊の詩集からピックアップされた作品と、未収録詩篇Ⅰ 韓国詩篇、未収録詩篇Ⅱ、未収録詩篇Ⅲ、それに知見知性の中でう

としての否、人間としての詩性と論を証明している声の、一書になっているといつてもいい。鈴木比佐雄の詩論集の重要性を内在した、一冊と断言しておきたい。この「場所論」には、『善の研究』で知られる日本を代表する哲学者、西田幾太郎博士の「場所」についての論文からの影響も強くある。彼は西田哲学の著書も読んでいたのである。

かような哲学的な見方というか、感性も、彼の歩まねばならなかった青春時代の《原風景》の、消しえぬ眼の結節にあったのかも知れないと、私は思っている。なぜならそうした経験の人生の眼は、溶解した血のごとく染み込んで、コイルして行く知識を欲し、学ぶ感性を背負う眼ともなるからだ。

私は、そうした現実的な知性を大切にする詩人で、批評者である鈴木比佐雄を一目している。コイルされる心音を伝え、表現する詩人の一人としてである。

こうしたリアルな眼と、感性の詩魂から社会や時代を捉え、人間の批判や現実を批判批評する、作品や声をうんで行く。平和への願いの声はそれであり、差別社会と

まれた詩についての論文、「詩の換喩的な内在批評が可能か」の膨大な作品群に、うーんと唸りながら味読し、彼の詩人的心情にある「さげばなければならぬ」精神も、理解でき納得している。

それは既に記した、労働者としての父や母の苦勞した姿。それに重なる、弟の苦惱の自殺の姿。さらに、自らの学問学生の時代経験、そして結婚を通して、親として子を育てる自覚など、肉親、血族を流れて回帰して行く生命の喜びと絆の尊さ、大切さを知る。その現実眼を開き、拡大されて転化する心耳の音などに、生きることのリズムを知らされたであろう。

心耳の音には、現実に生きている人間としての、リアルリズムの吐く息もつまれているからだ。そこに人として内在している、思念や見者の批評の眼、魂の眼のさげびもぶらさげられ放たれる、鎌なす舌の矢の言葉も内在されているからだ。

たとえば、第一詩集から選ばれた「予断」に見られる、父の手形の予断や油断が人生を狂わせたように、予断や油断せぬ人生、あるいは予断や油断を持つ眼に、魔神が

やってくることもあるからだ。そうした人生の断末魔的経験をして、真の眼や耳を大事にして行くことにつながるからだ。

予断や油断をたやすく許し、すきま風の吹き抜ける性格を軽く見て、さらに他者の精神に眼を向けることによって、ふかい複雑な人間心理のあることを、知らねばならないであろう。

鈴木比佐雄はそういう現実には立ち向かい、自らの眼で問いつづけ、歩いているのかも知れない。キルケゴールの説く「反復」の思想の重みを内在して。

詩人としての鈴木比佐雄は、弟や父の不幸な人生、あるいはその生き様、死に様をみて問いの反復に、逆に学ばされ、内省させられて察知する、遅しさの哲学を見つけ、自らの進むべき信念の羅針盤となしたのだと思う。

そうしたことが、彼の詩人としての自覚のさげびであり、かつ文化への手助けとなる出版業への道となったのかも知れない。私の関心のある部分でもある。人間性を大切にしなければならぬ、出版文化と詩人という狭間に立ってだ。

メージとしてあるのではなく、人として生きる世界の行為としてもある。そうした自らの「行為」の道程こそ、「業の花びら」的人生の、責務の任であるのかも知れない。私は、そう仏教でいう《業》を捉えている。

そういう人生の意味から、人は背負うべき業の声を、人生の心音として聴聞し、自らを内在凝視し、研ぎ澄まして精進する人種でもある。そうした心音の精神も運命の大切さだ。

一時の身として迷っていても、それを乗り越えて、克服してみせるのもまた人間である。

鋭敏で厳しい現実世界。三界火宅の世相に真実のある批評と批判を降らせ、その鋭敏な言説を大衆である民衆の人びとに、告発発進するのも、鈴木比佐雄という人間を徹底した、詩人の定めかも知れないと思う。

火を吐く熱き詩想の詩人の一人としてだ。

もつとそうした人間愛を説き、自然愛を説き、味のある人間の真味を降り注ぐ詩人の情心をさげぶのも、重要な思念であり、詩人の魂でもあろう。存在の詩人の姿で、その立場の批評者としてだ。

煎詰めて論じるならば、これもこの詩人の結節の眼となった、「原風景」の消しえぬ風景としての姿にあったともいえよう。

人間というものは、なかなか自分の意思するように生きられないこともある。それが現実であるのだ。しかし、一つの消しえぬ経験や、人生の転化できぬ一つの体験に、その身の在り方、生き方を学ばされ、暗示され、そこから再生の運命の灯りというか、救いとしての灯りを、見出すことができるのである。

その見出した生き方が、鈴木比佐雄という人間性に、詩人で批評者となり、出版文化への仕事として内的指針を示され、歩まねばならぬようになったことも、まこと不思議な因縁よと申してもよいであろう。

人は背負うべき、業をもっているものだ。ぶらさげなければならぬ精神の業を、担わなければならぬ運命もひきずっているものだ。

鈴木比佐雄が精神内在の詩人として、その魂の尊さのように敬愛している宮沢賢治は、これらの運命を《業の花びら》の道だとも言っている。《業》とは、暗いイ

その熱き火を、吐くがごとき詩人精神で、自らの本音の言説として散華する批評詩人こそ、真としての必要なた詩想者で、思想詩人となるであろう。オポチュニストとしてのなあなあ詩人は、私にとつては無用の長物の無味詩人でもある。鈴木比佐雄という人間性の詩人は、人間のふかい眼を包含した、長物の詩人の声を放つ人間である。その批評精神を担った詩人だと私は信頼している。

三 真味の大切さを説き、野草を愛する詩人の鋭い眼 鈴木比佐雄はそういう火を吐く熱情と、真実をさげぶ、真味の詩人である。そこには、やさしさと曲学せぬ信念を大事とする、批評詩人としての精神と愛が、着る服の魂としてあるからだ。

批評の真味をもたぬ詩人の詩言語の詩行は、気の抜けたビールみたいで、ビールの価値もなく無味なものだ。

では、なぜ私が鈴木比佐雄を「火を吐く詩人」といいながら、「やさしさの真味の詩人」といいながら、「やさしさの真味の詩人」というのかといえは、それはこの「詩文庫」に収録された半分以上の詩篇に、「火を吐く鋭

さ」と同時に、そつと静かに澄むような「野草」としての生命力のやさしさを、その咲く可憐な「美しさの花」として、「野草花」も多く挿入され描かれているからだ。

そうした野草や花の名前を、詩篇に見るたびに、ほととまごませてくれる野草の美しさが、静謐せいひつの心の音と、草花の柔和さの心としてイメージされてくるからだ。

このような詩のもつ手法というか、テクニクとしての挿入も、この詩人の特色の詩法的美であるかのかも知れない。

それは鈴木比佐雄という風景の自然音が、それ以上の人間のやさしさとしての、身体風景として絡みあっている心音にあるのかも知れない。言い換えれば、この詩人の《原風景》の、ネガティブな息吹のやさしさとなつてだ。弟の自死に、ただ無言のやさしの自然草として咲いていたのが、もしかしたら野草の自然美であつたのかも知れない。肉親としての詩人は、弟の死に場所に救われる野草美の柔和さを教えられたかも知れない。

野草やその花の美しさは、そうした影をいやす、自然としての愛と慈しみを、甘受の姿としてもっているか

可憐さを語っている。その野草花の存在を、己心こしんの存在の一つの主張というか、大切なさげびをつつむようになっている。

すなわち、浄化性のかくされた野草美や慈しみのさげびも、彼の詩人の内面性としてそつと咲かせていたといえようか。

たとえば、その一例として「ノカンゾウ」「ブタクサ」「オオアレチノギク」「ヒルガオ」「ヘクソカズラ」「ヤブガラシ」「ヤブジラミ」。さらに「ドクダミ」「ニガイチゴ」「ツユクサ」など。

それに大好きであつたと、詩人自らが告白している「タンポポ」も野草花に入るだろう（「タンポポ便り」）。そして、野草花というより、野人的花のイメージのある「ヒマワリ」も、詩人の愛した花であつたことが知れよう（「ヒマワリ」）。

こうした《野草》については、未収録詩篇Ⅰとして、この詩文庫で収めている「韓国詩篇」の中にも、質素でやさしい美しさを草花くさなとして登場させている。

よつほどこの詩人は、《野草》が好きで脳裡から離れ

らだろうか。鈴木比佐雄は詩というよりも、まず肉親の絆から《野草》を見つめ、無意識のように「野草」たちを愛しいやされたのだと思つている。

弟の自命に無心のやさしさと、真味をそそいでいたのが野草の花や、その姿の愛であつたであろう。鋭敏な胸臆むねおそに、詩人としての火を吐く比佐雄は、またやさしい野草のごとき自然愛を大切にしていた、詩人でもあつた。私はそうした念の心を、鈴木比佐雄に重ねている。

「火を吐く鋭敏な詩語」を見せる、詩人比佐雄も、弟思いの野草の美しさを愛した詩人であつたと。ほほえましくも、やさしい一念を兄として野草に語つていたのであろう。そこには、兄としての孤独の寂しさもあつたことだろう。

鈴木比佐雄の詩とその詩言語は、怒りのあるリアリズムの眼と声の批評精神も、重くうごめいており、社会の情況に対する批判もある。

そうした作品の中に、孤身のように生える野草の姿。また、その魂の美で咲かせる花たちの美のやさしさ。草や花のほつとするいらしさ、静かで澄んだいやしの

ないのかも知れない。脳裡から消えないものは、出自と風土の原風景にもつながる姿があるものだ。人生というもの、ある意味で言えば、自然四季の風景の影をひきずっているものである。その影とは、その人の人生の運命も暗示していることあろう。

だから自然の花や草は、濁りなき質素な美しさとして、人心を捉えるのだと思う。

逆説的に言えば、「火を吐く詩人」のごとき鋭敏なる批評詩人ともいつていい、鈴木比佐雄の眼底には、自然を愛し、自然に遊ぶ一面も大事にしていた。

ここに《野草詩人》の面影と、心の風土としての風景を夢現化した、一人の詩人像が浮かんでくる。《野草》の心理を愛する詩想から、この詩人を追求してみるのも、一つの見方であり、一つの面白さでもあるといつていい。そこで、私はもう少しこの詩人の好んだ「ヒマワリ」の詩について論じてみたい。

この詩は以前、第五詩集『呼び声』に収められていたが、今回の『鈴木比佐雄詩選集』（コールサック詩文庫）にも所収されている。

その「ヒマワリ」を、部分的ではあるが見てみよう。

「その町にはいたるところにヒマワリが咲き乱れてい  
た／むすうの見知らぬ瞳から黄色い光が発射されて  
／転校生は射すくまれたように立ちすくんでいた／  
〔略〕」

その転校した学校は木造校舎で、町も樹木が多くあ  
り、冷んやりした風が流れていたという。学校にはプ  
ールもあり、そのサイドには大きなヒマワリも咲いていた。  
プールの水面にはその大きな「黄色い瞳」を映し、「わ  
れはわれなりの顔」を存在させていた。

独立独行のように咲くヒマワリの姿に、転校生の彼は  
黙念し黙語する。その詩行がよい。

「ヒマワリの瞳の底の青空に落ちていった」

プールで歓声をあげている少年少女を、吸い込むよう  
に「ヒマワリ」は、慈しみの瞳でつつんでいたのではあ

う。

そしてその情景を、

「水着のないまだ泳ぐことを知らない転校生の目の前  
／ゆらめく巨大なヒマワリの瞳のさらなる奥へと／  
花びらが落ちるように黄色い水着の少女が飛び込ん  
でいく」

ここには、夏の王花のヒマワリの偉大な頭面と、転校  
生の不安ないじらしさの心情が、よくマッチし表現され  
ている。

ところで、この「ヒマワリ」の詩とともに、どうして  
も語っておかねばならぬもう一つの作品がある。野草の  
代表的花といつていい《タンポポ》である。彼の「原風  
景」を「生の風景」として背負っている、再生の命の綿  
となるタンポポ。彼の詩篇にも、いくつかのタンポポが  
うたわれているのだ。

詩人のふかい《真味》の、魂のやさしさがさげばれて  
いるのだ。

やはり第五詩集『呼び声』より採った「タンポポ便り」。  
『未収録詩篇Ⅱ』にある「八千代市のタンポポ」「キルケ  
ゴールの白花タンポポ」などだ。タンポポのもつ、ここ  
ろ洗われる素朴で質素な、清々しい美しさの、再生の白  
い綿を飛ばす種子。神秘的な白髪、自然神の命のように  
みえる白い種子。

では、「八千代市のタンポポ」と、「キルケゴールの白  
花タンポポ」を拝見してみよう。

手賀沼の土堤に咲く、タンポポを眼にして。

「ああ、この綿毛は／ただ風の力だけで／飛んでいっ  
たのではないのだな」

と、一人称のうなずきをみせながら、手賀沼の春の土  
堤の風景よ。へロケットのような仕組みが／あつたらお  
もしろいね」と、話している少女たちの会話をそばで聞  
き、笑む詩人。

「しゃがみこむ少女／綿毛を見つめ続ける瞳／綿毛の

重みで倒れかけた茎の不思議さ／タンポポの茎の最  
後の反発力で／綿毛は宇宙に発せられる／少女の心  
は／宇宙の意志そのものとなる」  
〔「八千代市のタンポポ」より部分引用。〕  
あるがままの、宇宙の意志の不思議さは自然の神であ  
らう。

「キルケゴールの白花タンポポ」では、へかつて山桜の  
咲く里で／白花タンポポを見たことがあるの冒頭の詩  
行につづけて、白いタンポポの《貴婦人》に、詩人の思  
念が追慕するように注がれる。その詩想の詩語がまた美  
しい。

「神の樹木から放たれた光の花びらが／二輪の白花タ  
ンポポに降り注いでいた／白い「野火」のように  
／白花タンポポが燃えさかっていた」

《白い「野火」》と表現する詩人の眼の奥には、消し  
えぬこの詩人の重い風景があつたかも知れない。留める

眼として……。

その他にも、私の印象に残った作品もある。

「火を吐く詩人」のイメージのある「東海村の悲劇」（まきとくじん）

「二十世紀のみどりご」「核の奴隷」「ハナダイコンを添えて」「祈りの花炎」。内面の祈りをみせる「黄道光」

「海を流れる灯籠」の精霊船に願う肉親の絆。

鳴海英吉を追憶する「草深」「市川・弘法寺にて」「日のゆらぎ」に見る光と影の人生。「まつろはぬ、神々」なども貴重な詩だ。

軽い口調、重い口調、さげびの口調の三つのリズムと  
いうか、自らの主張音を放ち、それにまた足を運んだ地方での詩や、韓国を旅したときの、友人とのジャズ演奏の詩もいい。いろいろな情念をからませた、にぎやかな手法も面白い。それも一つの詩法であるのだろう。

ともかく、この詩人鈴木比佐雄の自存の場所である、「生、風景」から生まれた作品は、言うなれば自らの人間曼陀羅、人生曼陀羅を降らせるような、動と静を相対させた詩篇をうんでいると私はいいたい。いや断言したい。

喜怒哀楽のリアリズムと、野草のもつ風景、その照射される風光の眼にこそ、リアリティなやさしさがあるものだ。批判だけが詩人の声ではない。

鈴木比佐雄よ、その道を往け。そこにこそ、自らの詩想としての灯明（あかり）を示せ。

「人間、マンダラ」の詩人としてだ。自立自行の風景を歩まねばならぬ、信念の詩人、そしてその人間としてだ。独自の詩想と詩性は、そこから湧きでるであろう。火をうむごとく、せせらぐ湧水のごとく。

〈平成二十一年八月四日、まだ梅雨時のような日に稿なる。〉